



**戦隊ヒーロー
完全墮落計画** レッド編

目次

●英雄の陥落【触手/尿道責め】	2
少年たちの価値.....	27
平和の象徴.....	48
侵された聖域.....	57
○ウトガルザの実験室【検査/クスコ】	67

※サンプル版です。ウトガルザの実験室の途中まで読めます。

●挿入あり

○挿入なし

※何もついていない章は性描写なしです。

●英雄の陥落【触手/尿道責め】

静まり返った午後の教室に、チョークが黒板を弾く規則正しい音だけが響いている。

いつもなら最前列で誰よりも真剣にノートを取り、教師の言葉を一言も聞き漏らすまいと輝かせていたはずの真紅の双眸は、今は落ち着きなく泳いでいた。

唇をかみしめ頭を振ると、艶やかで健康的な赤い髪が揺れる。

机に両手を突いたまま、大和悠緋（ヤマトユウヒ）は目を強くつむり身悶えていた。

（あ、ぐ……っ、また、動いて……っ、いやだ、止まって、くれ……っ！）

自身の尿道口のすぐ裏側、淫靡な窄まりに、潜伏している生き物がくぷくぷと泡立つように蠢き始める。

「は、あ……っ、ふ、うう……っ」

だらりと垂れそうになる涎を必死に飲み込み、太ももをきつく擦り合わせて声を堪えるが、震える吐息までは隠しきれない。脂汗が滲む端正な横顔は、真っ赤に上気していた。

「ヤマトくん、大丈夫……？顔、すごい赤いよ」

隣の席の女子生徒が、悠緋の異変に気づいて心配そうに覗き込んできた。

普段から生真面目で、誰に対しても優しく頼りがいのある優等生、そんな彼だからこそ、こうして弱々しく蹲る姿に周囲もざわつき始める。

教壇の教師もチョークを止めて振り返った。

「大和、どうした？」

クラス中の視線が一斉に自分に集まる。

悠緋はジクジクと火照る下腹部、男としての象徴の奥をじわじわと侵食していく熱を、引きつる手で必死に押さえ込んだ。

「す、みません……ちょっと、お腹が、痛くて……っ」

悠緋は、震える脚でなんとか立ち上がると、消え入りそうな声で懇願した。

「ほ、保健室へ……行ってきても、いいですか……っ？」

「ああ、確かに顔が赤いな。大和、無理をせず、直ぐに行きなさい。誰か付き添いは」

「い、いえ！一人で、大丈夫です……っ！失礼します……！」

誰かに触られたら、その瞬間に達してしまうだろう。

悠緋は逃げるように教室を飛び出した。

「く、う……っ、は、あ、……っ」

教室を出て、目的のトイレまではあと数十メートル、それだけだというのに、今の悠緋にとっては果てしなく遠い道のりに思えた。

尿道に潜む『ヤツ』が、彼の焦りを煽るようにグズリと質量を増す。

『よく頑張ったね、偉いよユウヒ♡』

とでも言うように、不意に、ごちゅ、とナカで蠢いた。

いたずらな快樂の微電流、デリケートな尿道内壁をチクチクとからかうように小突く、悪意に満ちた戯れだった。

「ひ、あ……っ！？あ、ン、う……っ！」

狭い管の内側から、ピンと直接神経を弾かれ、悠緋は突き上げる異形の熱に耐えかね、壁に肩をぶつけながらその場にずると崩れ落ちた。

悠緋は溢れそうになる悲鳴を喉の奥で必死に押し殺す。

頭のナカの『ヤツ』に向かって、掠れた声を心の中で叫んだ。

(や、めろ……っ、中、つつく、な……っ！)

すると『ヤツ』は悪びれる様子もなく、彼の頭の中で

『こんなところでぐずぐずしていいの？』なんて煽ってくるのだ。

まばゆい陽の光が差し込む廊下、

そこを悠緋は、ただ一人になれる場所を目指して歯を食いしばり、這うようにして進むしかなかった。

ツンとしたアンモニア臭が鼻を突く。

音楽室の方からは、時折ピアノの旋律に合わせて、のどかな歌声が微かに聞こえてくる。

そんな日常の喧騒から遠く離れた、古いトイレの個室。

悠緋は下腹部を焼くような猛烈な異物感に苛まれながら、震える脚で、やっとの思いでそこへ辿り着いた。

個室の鍵を閉めた瞬間、限界を迎えた。

スラックスの硬い布地が、熱を孕んでパンパンに怒張した陰茎の先端に擦れるだけで、脳を直接揺さぶるような快楽の電撃が走る。

「は、あ、っ……あ……っ、もう、だめだっ……っ！あ、ひ、あ、あ……っ！」

半狂乱になりながら、悠緋は震える手でベルトを弾き飛ばし、スラックスと下着を一気に膝元まで引きずり下ろした。

力尽きたように便器へどさりと腰を下ろす。

「はっ……あ、んう……っ」

（出したい、出したい出したい出したいだしたい）

本来の排泄の機能を使って、中に居座っているヤツを丸ごと押し出そうと、必死に何度も力む。

だが、どれだけ腹に力を入れても、排泄物が出る気配は微塵もなかった。

それどころか、悠緋が必死に尿道口を窄めて押し出そうとするたびに、潜伏する『それ』はぬちゃり、と過敏な内壁にへばりつき、さらに奥へと根を張るように蠢くだけだった。

「ひ、ああ……っ、でない、ぬけない……っ！あ、あ、いやだ、いやだあ……っ！」

無理に力んだせいで、かえって陰茎の根本からドロりと粘度の高いカウパー液が絞り出され、尿道口へとせり上がってくる。

しかし、外へ溢れ出るよりも早く、尿道口に潜伏していた『それ』が、音を立てて、その体液を貪欲に吸い上げ始めた。

じゅるっ、とナカで吸い尽くす音が響いたのと同時だった。

悠緋の頭蓋の奥、脳みその複雑な溝にびっしりと張り付いた、目に見えないほど細かな軟体生物が一斉に歓喜したように蠢いた。

尿道から吸い上げられた熱と栄養が、神経の糸を伝って一瞬で脳へとフィードバックされる。

半透明の無数の触手が、悠緋の脳組織を愛撫するようにぬちゃりと波打ち、思考の隙間に滑り込んでいく。

(ひ、あ……頭、ん中、……動いて、る……きもち、悪いっ)

下腹部を貪るヤツと、脳を占領するヤツ、上下から神経を挟み撃ちにされ、悠緋の思考は強制的に快楽の色に染め上げられていく。

「はっ……あ、んう……っ」

じゅくっ、じゅっ、じゅるるるう……

「ひい、あ、あっ！？んああ、吸わ、吸われ……っ、あ、ひぎいっつ……！」

尿道にへばり付くモノに強く吸い付かれたことにより、悠緋の陰茎が震えあがり射精を迎えた。

しかし、本来であれば外に排出される筈のそれはまるごと蛭のような生物に貪り尽くされる。

「く……そ、こいつ……」

『ごちそうさま、昨日もあれだけ出したのに、沢山出せて偉いね。それにユウヒの精子は毎度濃くて美味しいよ♡』

「あ、ぐっ……も、いい加減にっ……し、ろ……っ」

『出したいって言ったのは君でしょ？出させてあげたんだよ♡』

己の無力さと無様な発情を、脳髓のナカから直接嘲笑うかのように、あの魔王の声が響いた。

人類の防衛組織において最高戦力『レッド』と謳われ、人々の希望であるはずの自分が、トイレの便器に跨り、男の象徴を無様に丸出しにしながら強烈な快感に身悶える。

すべては、尿道に潜伏する『ヤツ』の分身に、内側から翻弄されているせいだった。

地球を侵略せんと目論む悪の組織『ギガ・ネビュラ』

その組織を率いる絶対的支配者であり、隔絶した力を持つ異星の上位生物、それが、この頭の中に直接語りかけてくる魔王『ロキ』の正体だ。

先日、悠緋は奴らに拉致され、敵の根城へと連れ去られた。

ロキの放った言葉が引き金となり、昨日の凄惨な記憶が脳裏にフラッシュバックする。

(あの時、……あの部屋で、俺は)

ロキの操る無数の触手で四肢を縛り上げられ、空中へと吊るされた。抵抗する術など、最初からなかった。ぬめる肉塊に口と後孔を同時に犯し尽くされ、陰茎はまるで玩具のように弄ばれ続けた。

異星の上位生物であるロキの体液は通常の間人なら即死する猛毒だというのに、歴代最高のアセットである悠緋の強靱な肉体は、それを催淫剤として吸い上げてしまった。

ロキの凶悪な精液を体中に注がれ続けた悠緋の身体は、発情させられ、気が遠くなるほどの絶頂を繰り返し、何度も射精を強制され続けたのだ。

『あはは、えっちなこと考えてる。思い出しちゃった？またたっぷり遊んであげるからね♡』

「ち、がうっ……俺はっ……っ！」

思考を振り払うかのように、赤らんだ顔を必死に左右へと振る。だが、どれだけ理性で否定したところで口から出る悲痛な拒絶とは裏腹に、下半身はロキの愛撫を心待ちにする雌の肉体へと、一歩ずつ、進行していく。

「あ、ひい！んあ、あつ、んぐ、ううう～～ッ！」

否定の言葉はすぐに甘ったるい悲鳴にかき消された。

悠緋は嬌声を上げながら、涙の溜まった真紅の瞳をただ見開いた。吸い上げたカウパー液を栄養にして、ロキの一部がグズグズと肥大化を始めた。

熱を孕んだままの敏感な粘膜を、内側からねっとりと愛撫するように刺激され、悠緋は溢れ出る蜜を止めようと股間を強く圧迫するが、口からは潰れた悲鳴が漏れるばかりだ。

「あ、が……っ、は、あぁっ、……っひ、あ、あ……っ」

『……ねえ、いつになったら雌になるんだい？もう待ちくたびれたよ。早く僕の精子を沢山注いで、君を、さっさと孕ませたいのにさ』

ここにいるのはヤツの放った分身に過ぎないというのに、まるでロキ本人がこの場に佇み、自分の下腹部をあの冷たくて長い指先でねっとりと撫で回しているかのような錯覚に陥る。

あの日、敵の根城に囚われ、散々身体を暴かれた挙句、脳内回路の主導権を握られた。

思考のプライバシーすら奪われ、意識のすべてをロキと同期させられてしまったのだ。

だからこそ、離れていてもヤツの低い声が脳へと直接流れ込んでくる。

ただでさえ敏感な尿道を刺激され続けているというのに、この甘く絡みつくような声は下半身に響いて仕方がない。

「は、はな…れろっ、……っんあぁっ！」

『ええ～、嫌だよお。むしろ折角地上に戻してあげたんだからお尻振って感謝してもらわないとね』

「う……、く、……ふざ、けるなぁっ……ぁひッ！」

どれだけ必死に拒絶の言葉を紡ごうとしても、内壁をじゅくじゅくと激しく穿たれるたびに、悲鳴は甘ったるい嬌声へと裏返ってしまう。

戦士としての誇りも拒絶の意志も、脳内に直通した快樂の濁流によって、溶かされていく。

『ふふっ、いい声だ。でもいまいち変異薬の効きが悪いんだよねえ。男としての自我が中途半端に残っているからかなあ？』

脳内に響くロキの声が、愉悅を孕んで一段と低く、甘く、そして淫靡な狂気を帯びて変化する。

その瞬間、悠緋の尿道に潜伏していた分身が、体内の熱を吸い上げるようにして急激に膨張を始めた。

ズググッ……………じゅ……………じゅく、じゅる、じゅるううっ……………

「ひ、あぁっ……………！？なか、裂け、っ……………、うう……………っ」

狭い尿道が押し広げられていく、圧迫感に鈴口は限界まで抉開かれ、カウパー液がじわりと滲み出る。

しかしそれは次々と尿道口を塞ぐロキの触手に、出るそばからじゅぞっ、と不気味な音を立てて全てすすられた。

悠緋の体内、膀胱と直腸を隔てる薄い肉の壁を這うように、体積を増した分身がヌルヌルと不気味な音を立てて枝分かれしていく。

『あは、すごおい。ナカで僕の一部が動くたびに、君の思考ぐちゃぐちゃになってるよ？ああ…、早く子宮出来ないかなあ。とりあえず、アナルの方にも、僕を分けてあげるね♡』

人間の理を無視した、生命への冒涇ともとれる発言を笑いながら放ち、ロキは遠隔で自身の分身を意のままに操る。そこには人間の常識も、良心も一切存在しなかった。

「う、く、う……ッ！」

悠緋の内臓の裏側をナメクジのように這いずる軟体生物、その気味の悪い感触に身体を自由を奪われ、底知れぬ恐怖に震え上がった。

それはやがて直腸に到達し筒状の形を作り、強度を増すと前方の壁にある、男の最も敏感な性感帯、前立腺へと狙いを定めて一気に突き上げた。

ドチュツツツツツツツツツツツツ♡

「あッ、が……！？う、うゝ ～～～っ！」

尿道を激しく弄り回され、連動して後ろの肉壁まで内側から強引に抉り広げられる。

内臓を直接掴んで握り潰されるような、えげつない硬質の衝撃、肉壁の裏側を直撃した凶悪な刺激が、電流となって悠緋の背骨を駆け上がる。

脳髄を直接灼かれるような絶頂、悠緋の真紅の瞳が大きく見開かれる。

前立腺と尿道を同時に責め立てられ、その身はずっと絶頂を繰り返し射精をしているというのに、ロキの分身が栓をしているせいで一滴も零れ出ることはない。

ズブツ、ズブツ、ゴチュツ、じゅるつつつ、ズルツ、ズルツ！

「が……っ、は、あ、あぁっ、……っひ、あ、あ……っ！やめっ、ひ……っ、こ、壊れ、るっ！」

後孔の入り口から前立腺までのわずかな距離を、ロキの分身は狂ったような速度と質量で激しく行き来する。

ピストンが繰り返されるたびに、内側から直接、前立腺をゴリゴリと削られ、悠緋の身体は呼吸の仕方も忘れたように硬直していく。

『壊れないよ、ユウヒ、君のその頑丈な肉体は、僕の種を孕むためにあるんだから。ほら、もっと力を抜いて、僕に身を委ねてごらん？』

「だ、れ、が……っ、ひうっ！おま、え、なん、か……あ、がああッ！」

必死に絞り出した呪詛は、脳を灼く絶頂の波にかき消され、情けない鳴き声となって便器のなかに消えていく。

口を開けば開くほど、意に反して甘く濁った不細工な喘ぎが溢れ出してしまう事実、悠緋はただ絶望するしかない。

「あ、ぐ、あ、あっ！な、なかでっ、あ、あうう！」

人間の許容量を遥かに超えた、二重の猛烈な熱が脳内へと送り込まれる。

悠緋の意志とは裏腹に、彼の陰茎はビクビクと激しく震え続け、ロキの分身に栄養を送り続けている。

ズチュウウウーッ！

「んひい?!んああああ〜〜っ!?!」

吐き出した精液をロキの分身へと吸い取られ、搾り尽くされていく悦楽に、悠緋の脳内は真っ白に染め上げられていく。

「あはは！すごいすごい！どんどん出てくる！」

脳内に響くロキの声は、小さな子供のように残酷なほど無邪気だった。まるで無力な昆虫の羽をむしるかのよう楽しげで、そこには一切の悪意も、罪悪感という概念すらも持ち合わせていない。

だからこそ、その純粹な響きが悠緋の身体を、精神を、恐怖させた。

グチュツ！じゅううううっ、ごぷっ、ごぼっ！

「いっ?!な、…だ、これっ、う、あっ、はっ…あ、あつ
いいっ！」

「これ、なんだと思う？知ってる筈だよ？それね、君を雌にするためのお薬だよ。ここに戻す前に一発打ってあげたよね」

射精し尽くして空になり、きゅうきゅうと真空状態になった尿道の隙間へ入れ替わるようにして、どくどくと注ぎ込まれる正体不明の熱い液体、身体の芯をドロドロに融かしていく熱量と、本能的な悪寒に、悠緋はただ激しく戦慄した。

そんな少年の必死な様子に、男はくすくすと底意地悪く笑った。

「おうちに戻してあげたのに、いつまでも頑固に男の身体のままにいるからさ。薬の効きが悪い君のために、僕が中から直接、追加してあげたんだ」

「な、ん、だとっ、……ひ、あぁっ!？」

本来は外へ出すためだけの、狭くて細い尿道という肉の管、そこから下腹部の奥へと変異薬がなだれ込んでくる。

逆流しているはずの熱量に尿道の神経を激しく狂わされ、悠緋の脳内は、まるで「おしっこを無様に垂れ流し続けさせられている」かのような悍ましい錯覚に支配され、羞恥に顔を真っ赤に染める。

だが、実際にはロキの分身が鈴口をピタリと塞いでいるせいで、液体は一滴たりとも外へは逃げない。

「は、あ、あつ、出させて、……あ、がっ、あつ！腹、が、割れ、るっ！」

出したいのに、出せない。限界を超えて注ぎ込まれる薬液のせいで、下腹の奥、膀胱がカチカチに硬く突っ張り、物理的にはち切れそうなほどの激痛が悠緋を襲う。

逃げ場を失った薬液は、高まる内圧に押し潰されるようにして、悠緋の尿道壁や内臓の粘膜へとドクドクと強制的に吸収されていった。

骨盤の奥が、ドロドロに溶けて別のカタチに作り変えられていくような、熱が少年を狂わせていく。

「ちなみに、いま君のナカにある僕の一部はね、僕の本体と空間が直接繋がっているんだ。……つまり、こういうことだよ♡」

脳内でロキが囁いた瞬間、悠緋の直腸の奥深くで、蠢いていた触手がドクンッと脈打った。

次の瞬間、後孔を内側から抉るように、巨大な肉塊が空間を無視してズルリ……と這い出てくる。

「ひ、あ……っっ!?……これ、な、にっ……、ひ
ぎいっつっつ?！」

外側の括約筋は閉じているのに、直腸の真ん中に開いた「穴」
から、ロキの凶悪な剛直が直接出現し、内側から肉壁を強引に
押し広げていく。

ギチ、ギギ、ギチチッ……!ズブ、ズブブウウッ!!

「んおおおおっ?!ひ、ぐうっ、お、おく、やめえ、ええ
〜っ!」

遠隔でロキが愉悅に目を細めながら腰を振るたびに、そのピス
トンの衝撃と摩擦が、空間を超えて悠緋の胎内へと直接伝わる。

内臓の裏側を、ただ一方的に貪られる。強者による一方的な捕
食、便座にしがみつくと指先は白くなり、体は過剰な刺激にガ
クツガクツと震えあがる。

「あ、ぐうっ、ん、あ、あああ〜っ!」

最奥を突き穿たれるたび、悠緋の脳裏には凄惨な記憶が強制的
にフラッシュバックしていた。

肉壁をゴツゴツと内側から変形させる程の凶悪な太さ、粘膜を直に灼くような異常な熱量。

悲鳴を上げる悠緋の肉体は、すでにロキの歪な形状を、存在感を、恐怖とともに記憶してしまっていた。

抗う暇もなく、最奥の性感帯がその形にぴったりと嵌まり込み、馴染んでいく。

『へえ……、ねえユウヒ、今、僕のペニスの形を思い出してるでしょ?』

「ちが……っ、そ、な、わけっ…ん、あ、あ…っ」

『脳の神経を繋いでるんだから、君の考えてることなんて丸見えだよ。……基地で散々可愛がってあげた時の感覚、ちゃんと身体が覚えているんだね。僕のペニスの形が分かっちゃうなんて、ユウヒは本当にえっちだなあ♡』

思考ごとプライドを剥ぎ取られるような最悪の言葉に、悠緋はわななき、便器のフチを指が千切れるほどの力で掴んだ。

涙を流して絶望にひれ伏すことすら拒絶するように、真紅の瞳に激しい怒りと屈辱の火花を灯す。

目に見えぬ支配者の存在にただ圧倒されながらも、その魂だけは決して飼い慣らされてなるものかと、奥歯が軋むほど強く嘯み締めて己の戦意を繋ぎ止める。

「黙れ……っ、お前、の、なんか……ッ、……ひ、ぎいいいっつ！！」

『あはは、そんなに怖い顔しないでよ。口ではどんなに強がっても、君のナカは僕の形に合わせてジुकジुकに蕩けて、こんなにも締め付けてくるのに。男のくせに、僕に犯されるのがそんなに気持ちいい？』

必死に拒絶の意思を繋ぎ止めようとする悠緋の頑なな抵抗を、ロキはエンターテインメントとして楽しんでいる。

ロキが空間の向こうで一層深く腰を打ち付けると、直腸の奥でドスツと肉が爆ぜるような衝撃が響き、悠緋は再び絶頂の白光へと突き落とされた。

ゴッ！ゴッ！ゴッッ！ドスツッ！ゴチュッ、ゴチュッ！

ぬちゅっ、ぬちゅっ、ドチュツツツツ！！

「ひっ、いっ？！あ、ぐっ、っは、な、せ……っ、もう、やめっ……ひ、あっ、ああ～～っ…！」

粘膜を強烈に擦り上げ、えぐり潰すような無慈悲なまでに重いピストンが再開される。空間の裂け目から生える凶悪な質量が往復するたび、個室のなかにグズグズと淫らな水音が響き渡った。

ドチュウウウツツ！ズブツ、ズブツ、ゴチュンツ、ゴチュンツ！！

「ひ、あ、ああっ……！？いや、だ……いやだ、お前、なんかに……っ、ひぎいイイツツ？！」

どれほど心の中で激しい葛藤が渦巻き、抗おうとも、いずれ胎へと造り替えられるその奥を埋め尽くす質量を前に、悠緋の真紅の瞳には生理的な涙が溢れ、ただ無力に震えることしかできない。

理性を溶かす電撃が脳内を激しく揺るがし、快感の凄まじさに、視界が真っ白に明滅して意識が飛びかける。

「あはっ、最高だよユウヒ！僕もすごく気持ちいいよ……！僕を受け止めてくれるのは君だけだ…」

ビュクッ、ビュクビュクビュクッ！ドビュッ！！

空間の向こうから、ロキの規格外な熱量を持った精液が、直腸の奥へと勢いよく噴射される。

「ひぎいっつ……！？あつ、い、で、て…る、ひうッ！！」

「まだ出してあげるからね。一滴残らず僕の種を全部受け止めてっ♡」

ドクドクドクッ！ゴポンッツツツツツッーッ！

ドブドブドブドブドブドブドブッ！！

常人なら即死するほど強力な高位種の精液が、直腸を破裂しそうなほどに満たしていく。

先ほど尿道に流し込まれた変異薬と、後孔に大量に注がれていくロキの精液、上下の器官から挟み撃ちにするように、悠緋の身体は内側から侵食され、ドロドロに溶かされていく。

「あ、が……あ、ああ……ツツ！あ……っ、腹があっ……！」
内側から子宮のスペースを無理やりこじ開けられるような、細胞の胎動。

悠緋の視界は真っ白に染まり、便器に突っ張っていた指先から力が抜けた。

激しい耳鳴りの向こうで、ロキの満ち足りた笑い声が遠ざかっていく。

混濁していく意識のなか、悠緋の記憶は、狂おしい運命が始まったあの日の光景へと、深く、深く沈んでいった。

少年たちの価値

すべてが狂い始めたのは、あの日、

クラスメイトであり幼馴染の巽蒼士(タツミソウシ)と共に、放課後、呼び出された時からだった。

名目は、学校全体で行われていた「国家防衛に関する意識調査」のアンケートに記入漏れがあった、というものだ。

放課後の静まり返った廊下を、蒼士と並んで歩く。

「優等生のお前が記入漏れなんて珍しいな」

「蒼士こそ、こういうの、いつもきっちりやる方だろ。」

後から言われる方が面倒って言ってさ」

「そりゃそうだ。時間がもったいないだろ」

いつもの効率主義者らしい答えに、悠緋は小さく息を吐いた。

平均より背の高い自分よりも、少し高い位置にある蒼士の横顔を見上げる。すらりとスレンダーな体軀も手伝って、佇まいは同年代とは一線を画す大人びた雰囲気は漂っていた。

どこか眠たげな垂れ目と、中性的でアンニュイな鋭さを残す端正な顔立ち。その涼しげな横顔をなんとなく眺めていると、蒼士が視線に気づいて眉を上げた。

「なんだよ」

不思議と目を引く綺麗に整った顔立ちに見つめ返され、悠緋は苦笑交じりに肩をすくめた。

「別に。相変わらずブレないなと思ってさ」

少しだけ声を落とし、昨日から気になっていたことを切り出した。

「そういえば、あの後、大丈夫だった？」

「ん？あぁ、いつものことだよ。散々泣きわめいて、疲れて寝たよ。逆に悪かったな、折角来てくれたのに」

「いいよ。お前も大変だな」

「お前もな」

お互いに、それ以上は深く踏み込まない。それが幼い頃からの二人の暗黙のルールだった。

蒼士の家は母子家庭で、下に5歳と4歳の幼い兄弟がいる。

学校帰りに夕飯の買い出しをし、兄弟たちを保育園へ迎えに行くのが彼の日常だ。

昨日はテスト前だからと蒼士の家で一緒に勉強を始めたものの、案の定、癩癩を起こした妹が何をやっても泣き止まず、結局悠緋は帰り際までずっと泣き声を聞く羽目になったのだ。

(……昔から、蒼士には自由がない)

階段を上りながら、悠緋は心の中でそっと独りごちる。

近所に住む同い年の二人の出会いは、小学校に上がる前に遡る。

当時の悠緋は、すでに防衛組織の高官である父親から、厳しい英才教育を叩き込まれていた。

同年代の子供たちが公園で楽しそうに遊ぶ声を遠くに聞きながら、父親に怒鳴られ、時には頬を叩かれ、終わりのない特訓を強要される日々。常に父親の影に怯えていた。

ある日、どうしても耐えかねて家を飛び出し、近所の公園の遊具の影に隠れて、声を殺して泣いていたことがある。

それを見つけたのが、蒼士だった。

蒼士は泣いている悠緋を見つめると、一度黙ってその場を離れ、すぐに小さなお菓子の袋を持って戻ってきた。そして、悠緋の隣に無言で腰掛け、袋をバツと開けて差し出してきたのだ。

言葉のない、けれど確かな救いだった。

あの日以来、二人は仲良くなった。

逃げ出した夜は父親に死ぬほど叱られたが、母親が怯えながらも

「あなた、流石にこれは教育の域を超えています……。まだあなたの子には早すぎます、どうかこれ以上は……」

と珍しく父親に苦言を呈してくれたおかげで、ほんの少しだけ特訓のメニューが和らいだのを覚えている。

それから父親の怒りが限界に達するたび、悠緋は蒼士の家を臨時の「隠れ家」代わりにさせてもらっていた。

そんな、互いの家庭のドロドロとした裏事情を知り尽くしているからこそその軽口だ。

「着いたぞ」

蒼士の声で、悠緋の意識を過去の暗がりから強引に引き剥がした。ハッと顔を上げると、いつの間にか、目的の扉の前に立っていた。職員室の並びにある、普段は滅多に使われていない開かずの相談室だ。

「記入漏れごときで、わざわざ呼び出すなよな」

「まあまあ、さっさと終わらせて帰ろう」

蒼士はいつもの不愛想な顔に、さらに眉間の皺を深く刻ませながらドアノブを回した。

「失礼します……」

足を踏み入れた瞬間、室内の独特の雰囲気によって身体が強張った。

部屋の中央にはコの字型に机が配置されており、すでに3人の生徒が重苦しい沈黙の中で着席している。

そして、その中心に座っていたのは、校長だけではなかった。

学校という空間にはおよそ似つかわしくない、軍の厳格な制服を纏った二人の『士官』が、鋭い眼光をぎらつかせている。

入室した途端、一斉に浴びせられる大人たちの値踏みするような視線、それはまるで、品定めをするような目だった。悠緋は急に息が詰まる心地がし、手の置き場も視線のやり場も分からなくなって、その場に立ち尽くしてしまう。

「大和悠緋くん、巽蒼士くんだね。空いている席に座りなさい」

校長に促され、二人はそれぞれ無人の椅子に腰掛けた。

蒼士とは机を挟んで向かい合わせになる形になった。

緊張で肩を硬くする悠緋の隣には、小柄な男子生徒が座っていた。ふと目が合うと、彼は緊迫した室内の空気などこ吹く風といった様子で、ニッと人好きのする笑みを浮かべて小声で話しかけてくる。

「一年生？何で呼ばれたんだろーね。聞いても誰も教えてくれないんだよねー」

見れば、彼のブレザーの胸ポケットには、3年生を示す緑の学年色の刺繍が入っている。

最上級生の先輩ですら、呼び出しの理由を知らされていないようだ。

「え、と……」

この張り詰めた空気のなかで私語を交わすのは流石に躊躇われる。悠緋が困惑して言葉を濁していると、中央にどっしりと構えていた初老の士官が、厳かに口を開いた。

「集まってもらったのは他にもない。ここにいる5名には、国家防衛の要たる『セイバーズ』の今期正規メンバーとして、選出された」

テレビの向こうの英雄である『セイバーズ』の名を出され、室内の空気が一変する。生徒たちの間にピリピリとした緊張が走った。

士官が手元のマスター端末を操作すると、悠緋たちの前の机に埋め込まれていたスロットから、それぞれ薄い透明のデータパッドが音もなくせり上がってきた。

端末の画面が淡く発光し、悠緋の視界に『極秘：A-H 適合体プロフィール』という文字とともに、空中へ立体的なホログラムデータが展開される。

そこには、今この部屋に集められている生徒たちの顔写真と、遺伝子レベルにまで至る詳細な個人ステータスが、デジタル文字で網羅されていた。

「選ばれた、とは……どういうことでしょうか。我々はただの学生です。何かの間違いでは？」

そう問いかけたのは、悠緋の斜め前に座る少年

神楽木碧（カグラギアオイ）だった。

ホログラムを指先でスワイプし、彼のウインドウを表示させる。2年生、いかにも優等生然とした出で立ちで、少し癖のある短い髪を揺らし、知性的な瞳を縁取る細身の眼鏡のフレームを、くい、と指先で持ち上げている。

彼の胸元には2年生の青い学年色が刺繍されていた。

士官は感情の籠もらない目で碧を見つめ、淡々と告げた。

「間違いではない、神楽木碧くん。君たちの肉体から検出された『A因子』の適合数値は、いずれも軍の規定ラインを遥かに上回っている。……セイバーズというシステムは、その特殊な生体適合の都合上、肉体と精神が柔軟な『若者』にしか扱えない。故に、組織は代々、君たちのような適合者を極秘裏に選出し、その座を引き継がせてきたのだ」

「引き継ぐ……？代々って、継承制ってこと？」

今度は、隣に座る3年生の星野陽（ホシノハル）が身を乗り出した。資料の隅には、大きく『イエロー 適合体』とスタンプが押されている。

「セイバーズは今だってテレビで怪人と戦って、活動を続けているよね？その人たちはどうなるの？」

「現行のメンバーは、年々その適合能力が著しく減退している。戦力として機能しなくなる前に、新たな適合体へと席を譲る。それだけのことだ」

士官のあまりに無機質な、人間をパーツか何かのように使い捨てる物言いに、悠緋は背筋が寒くなるのを覚えた。

その時、席の奥側から、フッと低く皮肉げな笑い声が響いた。

「それ……国家の最高機密情報なんじゃないの？なんで俺たちにそんなことペラペラ喋るわけ？」

声の主は逢坂春馬（アイサカハルマ）2年生、資料には、ピンクの適合者だと記されている少年だ。

芸能人だと言ってもおかしくないほどに整った顔立ちをした少年で、ハーフアップに結い上げた艶やかな髪が、首を傾げる動きに合わせて揺れる。

彼は大人たちの威圧感に気圧されることなく、挑発的な眼差しを士官へと向けていた。

士官は春馬の不遜な態度を咎めもせず、さらに声を低めた。

「機密だからこそ、この場で話している。なぜなら君たち5人は本日この瞬間をもって、その機密を守るべき当事者となるからだ。……すでに君たちの親権者からは、国令に基づく事前承諾を得ている」

「っ——！？」

その言葉に、悠緋は自分の心臓が大きく跳ね上がるのを感じた。

（親からの、承諾……？）

ホログラムに浮かび上がる、自身のプロフィール欄、

そこに並ぶ歴代最高の適合数値と、最下部にある見紛うはずもない父親の、あの軍高官である男の、恐ろしいほど達筆な電子サインが目にとまった瞬間、悠緋の全身からいやな汗が吹き出した。

（やっぱり、父さんが仕組んだことだったんだ。俺は、あの人の兵器として）

呼吸を乱す悠緋の異変に気づいたのだろう。正面に座る蒼士が、鋭い視線を真っ直ぐにこちらへ向けた。

そして、その瞳に微かな怒りの炎を灯したまま、大人たちに向かって遮るように口を開いた。

「親が承諾したから、何だっていうんですか。俺たち本人に拒否権はないんですか？……名誉なんて、俺には一ミリも興味ありません」

憎しみと強い拒絶の意志が籠もった、蒼士の刺すような言葉。

しかし、士官は嘸み付くような彼の態度に微塵も動じず、むしろ憐れむような薄い笑みを口元に浮かべた。

「もちろん、強制ではない。君たちが首を縦に振らない限り、契約書は発効しない。……だが、異蒼士くん、君の家庭環境は、決して余裕のあるものとは言えないはずだ」

「っ、お前……！」

「『A因子』による生体兵器システムは、適合者の精神状態に著しく左右される。恐怖や義務感だけで戦わせても、最大戦力は発揮できないからね。だからこそ、我々は君たちに『戦うための理由』……すなわち、相応の見返りを用意している」

士官が手元の端末を操作すると、5人のデータパッドに新たな秘匿項目が滑り込んできた。

そこに並ぶ数字と条件を見た瞬間、部屋の空気が目に見えてそわそわと波打ち始める。

「セイバーズとしての契約を結んだ瞬間、君たちの口座には国家最高ランクの特務手当が毎月振り込まれる。家族が一生涯、贅沢をして遊んで暮らせるだけの額だ。さらに」

士官はそこで一度言葉を切り、今度は蒼士を真っ直ぐに見据えた。

「国令により、君たちの学校生活における出席日数や成績は、今後の出勤状況に関わらず完全保証される。どれだけ遅刻しようが、授業を抜け出そうが、誰も君たちを咎めない。

そればかりか、この学園の敷地内に、君たち5人だけが自由に使える最高級のセキュリティ付きの『専用個室』を提供する。誰にも邪魔されない、君たちだけの自由な特権空間だ」

「っ、出席の保証……それに、専用の個室……」

真っ先に反応したのは、他ならぬ蒼士だった。

家族のために家事や育児に縛られ、自分の時間がろくになかったヤングケアラーの彼にとって、家族を一生養える金と誰にも邪魔されない自分だけの居場所は、喉から手が出るほど欲しいものだった。眉間の皺が、驚きと葛藤で僅かに揺らぐ。

隣の陽も、ホログラムの数字を凝視したまま

「え、これマジ……？桁、間違っていないよね……？」と、興奮を隠せない様子で悠緋の肩を小突いてくる。

端の春馬も、退屈そうにしていた態度を一変させ、綺麗な瞳を細めてデータを見つめている。

碧も眼鏡の奥の目を鋭く光らせ、国家が提示した破格の条件を冷静に計算しているようだった。

「どうかね？親のためではない。君たち自身の望みを叶えるための、これは契約だ。じっくり考えて、サインしてほしい」

大人たちの狡猾な包囲網、金と自由というあまりにも甘い餌をチラつかされ、室内には十代の少年たちならではの、抗いきれない動揺と欲望がじわじわと満ちていく。

悠緋は、自身のサイン欄を見つめたまま、喉を鳴らして生唾を飲み込むことしかできなかった。

蒼士が葛藤に震える指先で、空白のサイン欄に触れようとしたそのとき、悠緋は耐えかね、弾かれたように叫んでいた。

「待て、蒼士っ……！俺たちの命は、安全は、確実に保証されるんではないか！？」

静まり返った室内へ響き渡った、悲痛な叫び。

それは、大人たちに対する悠緋のせめてもの抵抗だった。

破格の特権を前面に押し出し、未成年の子供を死地へと向かわせようとする歪な空間。

確かに今の蒼士の境遇は酷く苦しいものだ。けれど、命には代えられない。

蒼士は悠緋の切実な声にビクリと肩を揺らし、ハッと我に返ったように指を止め、悠緋を見つめ返した。

場に冷や水が差されたというのに、中央の士官は慌てる素振りすら見せず、これ見よがしに深いため息を吐いてみせた。

トントン、とデスクを爪で叩きながら、悠緋をあざ笑うような視線を向ける。

「……大和悠緋くん。歴代最高の数値を叩き出した適合者だからどれほど豪胆な男かと思えば、随分と慎重、いや、臆病なんだね。防衛隊高官である君の御父上は、骨のある息子に育てられたと胸を張っておられたが？」

「っ、父は……！父のことは……」

父親の名を突きつけられた瞬間、悠緋の顔から血の気が引いた。

まるで指先から急速に凍りついていくかのように体温が急降下し、その端正な顔を真っ青に染めていく。

士官はその怯え、あきらかに狼狽えた様子の悠緋に満足げに口元を歪め、大げさに両手を広げた。

「安心したまえ。君たちの身の安全は、国家のテクノロジーが保証する。君たちに投与される『A因子』と、支給される特殊適合スーツは、人類の科学の結晶だ。

怪人の生体攻撃など、かすり傷一つ負わせることはできない。……現に、ヒーローたちが敗北した姿を見たことはあるかね？ 彼らはずっと勝ち続けているのだよ！現にセイバーズの歴史において、戦闘による『死亡者』は今日に至るまで、ただの一人も出ていない」

士官は嘘偽りのない口調で、平然と言い放った。

ずっと勝ち続けている、『死亡者』は、ゼロ

その完璧すぎる歪な無敗神話がかえって、悠緋の胸の奥にどす黒い違和感を刻みつける。

（本当に……？一度も負けずに誰も死んでいないなら、どうしてニュースに映るセイバーズの戦い方は、ときどき別人のように変わるんだ？まるで、中身だけがそっくり入れ替わったみたいに……。それに、前まで戦っていたあの適合者たちは、今どこで何をしている……？）

テレビの画面の向こうに鎮座する、絶対的な防衛の象徴。

その輝かしいプロパガンダの裏側に、底知れない暗黒の落とし穴が潜んでいるような不気味さを、悠緋の防衛本能がはっきりと察知していた。

しかし、その不穏な沈黙を切り裂くように、士官はさらに甘い声音で少年たちを唆す。

「無傷で、英雄になれる。家族を救い、自分自身の自由な特権階級を手に入れられる。これ以上の安全な投資が、この世にあるかね？」

士官の厭味ったらしくも確信に満ちた煽りが、再び部屋の空気を支配していく。

悠緋の必死の制止も虚しく、その言葉は少年たちの退路を確実に断っていった。

「ふーん……。ま、死なないなら別にいいよ。何より、お金も部屋ももらえるでしょ」

逢坂春馬が退屈そうに髪を指先で弄りながら、一番にデジタルパネルをタップした。承認を告げる電子音が無機質に響く。

「僕も同意します。親権者が了承している以上、国家の要請を拒む理由はありません」

神楽木碧が眼鏡の奥の瞳を光らせ、データパッドに淀みなくサインを書き込んでいく。

「え、じゃあ俺も俺も！メチャクチャ目立てて、おまけに金も貰えるなんて最高じゃん。やるやる、絶対やる！」

星野陽が身を乗り出し、ゲームのスタートボタンでも押すかのような軽快さでパネルを叩いた。

3人の承認が瞬く間に完了し、室内の視線がまだ動いていない2人へと収束する。

蒼士はゆっくりと悠緋を一瞥した。その双眸には、親友の懸念を理解しつつも、目の前の自由をどうしても逃せないという、悲痛なほどの決意が宿っていた。

「……悠緋。悪いな、俺はやるぞ。お前は……いや、なんでもない」

拒絶を懇願するような悠緋の視線から逃れるように、蒼士の指先がパネルへと滑る。

4つ目の電子音が、まるで悠緋を取り残す宣告のように重く響いた。

「さて……大和悠緋くん、君以外の全員のサインが確認できた」

士官がクツクツと喉を鳴らし、これ見よがしに悠緋の端末へ視線を落とした。その目は、獲物を追い詰めた蛇のそれだった。

「まだ十代半ばの子供だ。怪人が怖い、死ぬのが怖いというのは、生物として至極真っ当な防衛本能だよ。誰も君を責めやしない。……ただ、そうだね。歴代最高の数値を出しながら、戦う前に敵前逃亡したと知れば、君の御父上は、一体どれほど深く失望されるだろうねえ？」

「っ、父さん、のことは…関係ありません…」

「御父上はいつも、君に大きな期待をかけていると言っていたよ。しかし……そんな我が子が英雄になることを自ら拒んだと知ったら、彼は、どうなってしまうのだろうかねえ？」

愉悦に唇を歪める士官の言葉が、悠緋の脳裏で最悪の想像を膨らませていく。

逃げ出した夜、躊躇なく自分を殴り飛ばした父親の、あの怒り狂った貌、もし今ここで拒絶すれば、あの狂気じみた男の元へ、ただの出来損ないとして送り返される。

それは悠緋にとって、死ぬことよりも恐ろしい地獄だ。

4人がサインを終えたホログラムの光に白く照らされながら、悠緋は震える指先を、自分のデータパッドへと伸ばすしかなかった。

平和の象徴

リビングの大型 3D モニターにニュース番組が映し出される。

『続いてのニュースです。本日 15 時頃、中央区に突如出現した怪人ギガ・ネビュラ、グラップル型ですが、出動した国家防衛チーム『セイバーズ』によって、わずか 5 分で鎮圧されました。こちらがその時の映像です』

画面が切り替わり、ヘリコプターからの空撮と思しき緊迫した映像が映し出される。

そこに映っていたのは、高層ビルのコンクリートを紙屑のように引き裂く、推定全長 5 メートルの巨大な怪人だ。

人間に近い二足歩行のシルエットを持ちながらも、全身を強固な生体装甲で覆い、圧倒的な質量と腕力で街を破壊していく、前線特化型の怪人。

だが、その絶望を切り裂くように、天空から一筋の真紅の閃光が降り立った。

現れたのは、セイバーズのリーダー、レッドだ。

グラップル型が咆哮を上げて巨大な拳を振り下ろすよりも早く、レッドが振り下ろした超高エネルギーブレードの斬撃が、怪人の巨体を一瞬で両断する。

ドゴオオオンッ！！と、画面全体が白く染まるほどの派手な大爆発。

爆煙が晴れた画面の中央、微傷一つ負わずに悠然と佇む真紅の背中に、ニューススタジオからは地鳴りさながらの歓声が上がった。

『いやあ、やはりリーダーレッドの強さは圧巻ですね！これぞ至高！これが、私たちが待ち望んだ男の姿です！まさに人類の希望です』

興奮気味に語る若い女性アナウンサーの隣で、メインキャスターを務める初老の男が、フッと手元の資料に目を落としながら頷いた。

『ええ。ここ数ヶ月間は特に、セイバーズは文字通り無敵の強さを誇っていますからね。まさに無敗の神話ですよ』

メインキャスターの男はそこで一度言葉を切り、少し表情を曇らせてフリップを示した。

『ただ、気になるのはここ3ヶ月間での怪人の出没件数です。それ以前に比べて、なんと倍近くにまで急増している。

セイバーズの負担も相当なもののはずですが、彼らはそれすら微塵も感じさせない。……ただ、ネットの一部では、ここ数ヶ月でレッドの戦い方が別人のように鋭くなったという指摘もあり、代替わり説を邪推する声も上がっていますがね』

『ふふ、何はともあれ、強くなってくれたならファンとしては大歓迎です！さて、次のニュースですが――』

リビングのソファに座り、目を輝かせて画面の英雄を食い入るように見つめている少年。

対面式のキッチンから、夕飯の支度をしながら母親がふう、と小さく溜息を吐き出した。

「それにしても、最近アラートが鳴る回数が増えて嫌になっちゃうわね。でも、セイバーズたちがいてくれれば、この街は安全ね」

トントン、と小気味よい包丁の音を響かせながら母親が呟く。

テレビ画面は番組からCMへと切り替わり、アップテンポな重低音とともに、最新の『セイバース変身ベルト・30XXモデル』が画面いっぱいに映し出された。

『君も因子を覚醒させろ！滾る光子！鳴り響くサイレン！セイバー・コア RED、ついに発売！』

「ママあーっ！あれ欲しいーっ！！ボクもレッドになるーっ！！」

男の子がクッションの上で飛び跳ねながら、キッチンに向かって全力で声を張り上げる。

「はいはい、お誕生日まで待ちなさいね」と笑う母親、お茶の間に流れる、どこにでもある平和な、幸福な光景。

テレビの向こうの英雄たちが、その裏でどれほどの重圧を背負わされ、檻に閉じ込められているか、お茶の間の彼らは、何一つとして知らないのだ。



巨大学園の敷地、その最も奥まった一等地に、国家防衛チーム『セイバース』の専用寮は佇んでいる。

周囲を嚴重な不可視のセキュリティーフェンスと防音壁に囲まれたその建物は、外観こそ洗練されたモダン建築だが、内実は国費が惜しみなく投入された最新鋭の要塞シェルターでもあった。

エントランスを抜けると、広大な吹き抜けのリビングと、プロの厨房並みの設備を誇るキッチンが一体となった共有フロアが広がっている。

『戦場では互いの命を預け合う運命共同体、ゆえに、可能な限り食事は共に摂り、親睦を深めるべし』

それが防衛組織からの推奨事項だった。もちろん強制ではない。

決まった時間になれば管理スタッフがやってきて、レストランに出てくるような食事を作り、掃除をこなして、彼らと鉢合わせることなく去っていく。

各々に与えられた完全防音の個室には、最新の高級家具がすべて経費で備え付けられていた。

少年たちに与えられた、至れり尽くせりの、あまりにも不自然な家庭、まるで、精巧に作られた箱庭のようだった。

その日の夕食は、肉汁の溢れるハンバーグだった。濃厚なデミグラスソースの香りが広がるプレートには、フライドポテトにブロッコリー、そして鮮やかなオレンジ色のキャロットグラッセが添えられている。それにグリーンサラダと、透き通ったコンソメスープ。

戦闘を終えたばかりの少年たちの食卓は、一見するとどこにもある学生寮のそれだった。

「ほい、悠緋！レッドはエネルギーが必要だからな！」

「……陽先輩、人参を押し付けないでください。好き嫌いは良くないですよ」

フォークで器用にキャロットグラッセを悠緋の皿へ滑り込ませようとした星野陽を、大和悠緋は少々呆れたような、咎める眼差しで睨みつけた。

「いやいや、普通の人参なら俺だって食えるよ？でもさあ、これなんか妙に甘いじゃん！」

「あー……それはなんかわかる。俺もそれ、あんまり好きじゃないな」

優雅にナイフを使いハンバーグを切り分けながら、逢坂春馬が同意する。

「な？そう思うよな！そういうことだ！」

「そういうことじゃないです！春馬先輩は文句を言いつつも、ちゃんと残さず食べてますよ！」

悠緋がピシヤリと指摘すると、陽は「げえ、マジだ。大人だなあ春馬は……」と大袈裟に肩を落とした。

そんな騒がしいやり取りを、少し離れた席から、感情の読めないポーカフェイスでこちらの様子を気に懸けていたのが、神楽木碧だった。

「騒がしいですね。陽先輩、今日使われているのは、適合者のA因子活性化を促す成分を配合した、組織特製の遺伝子組み換え野菜です。栄養効率を考えれば、残す選択肢はありませんよ」

「うわ、出たよ碧のウンチク……。飯の時くらい成分の話すんなって。なあ、蒼士？」

助けを求められた異蒼士は、自身の皿のグラッセを一口で片付けると、ふうと息を吐き出した。

「俺は、こんないい肉使ったハンバーグが毎日タダで食えるっただけで文句ねえよ」

「あはは！相変わらずすかしてんなあ、蒼士は」

隣の席から陽がケラケラとからかうように笑うと、蒼士は手元のグラスを弄びながら、フッと視線を悠緋へと向けた。

冗談に付き合う気はないとばかりに、その瞳に静かな厳しさを宿す。

「それより悠緋、今日の戦闘、最後のグラップル型……お前の突撃、ちょっと危なかったんじゃないか。いつもなら碧の指示を待つだろ」

その言葉を切り口に、食卓の空気は一気に『セイバーズ』としてのものへと切り替わった。

「……ごめん、少し、焦っていたかもしれない」

悠緋は父親の顔を脳裏から振り払うように、小さく首を振った。
碧が眼鏡のブリッジを中指で押し上げ、感情の起伏を排した生
真面目な声で、客観的な分析を口にする。

「悠緋の焦りも問題ですが、それ以上に気になるのは敵の動向
です。ここ3ヶ月間、怪人の出現率は単純計算で倍増している。
それだけじゃない。今日のグラップル型、俊足のチェイサー型
の特徴も混ざっていませんでしたか？まるで、こちらの戦術を
学習し、急速に『進化』しているようだ」

「進化、ねえ……」

春馬がフォークの先でハンバーグを突き刺しながら、不敵な笑
みを浮かべる。

「ただの化け物にしては、最近のあいつら、妙に手際が良すぎ
るんだよ。……まるで、裏で誰かが指揮でも執ってるみたい
にさ」

その言葉に、誰も反論できなかった。無敗の英雄として世間
もてはやされる裏で、確実に何かが変わり始めている。

その不気味な違和感が、豪華なリビングの空気をじわじわと侵
食していくようだった。

侵された聖域

最先端のホログラムネオンが輝く学園都市から車で一時間。

広大な結界樹林の奥深くに、大和の家系が構える邸宅はある。

30XX年という超近代社会において、広大な敷地に建てられた純和風の木造建築。

それは、国家防衛組織の最高幹部である父親の、絶対的な権力と財力の象徴そのものだった。

ガラス一つない、磨き上げられた廊下。

静寂が支配する和室で、悠緋は母親と二人、向かい合って座っていた。

ちゃぶ台の上には、静かに湯気を立てる宇治茶。

そして、季節の生菓子が二つ、黒文字の楊枝を添えられて上品に並んでいる。

初夏を思わせる、美しく透き通った錦玉羹（きんぎょくかん）の中に青楓の葉が模されている。目にも鮮やかで涼しげな、至高の職人技だった。

「……お前がテレビで戦っている姿、いつも観ていますよ、悠緋」

穏やかに微笑む母親の顔には、どこか常に何かに怯えているような、繊細な影があった。

悠緋自身が色濃く受け継いでいるその顔立ちは、丸みを帯びた瞳やどこか人懐っこさを感じさせる、本来なら周囲に愛される小動物のような愛嬌に満ちたものだ。

だからこそ、その柔和な面輪に張り付いた歪な怯えが、悠緋の胸をちくりと刺す。

悠緋は生菓子を小さく口に運び、その上品な甘さを嘸み締めながら、努めて明るく微笑み返す。

「うん、頑張ってるよ。みんな強いから、心配しないで」

「私……少し、安心したのよ。あなたがセイバーズに選ばれて」

ほっと胸をなでおろすような母親の言葉に、悠緋は湯呑みを引き寄せる手を、ふと止めた。

「え……？」

母親は切なげに目を伏せ、自身の細い指先を見つめながら、ぽつり、ぽつりと心の奥を吐露するように言葉を紡いだ。

「だって、もし選ばれなかったら……、あなたがどうなってしまっていたか分からない。あの人は、あなたを完璧な『兵器』にするつもりだったから……。あなたが家を出て寮に移って、やっと、あの人の折檻から解放された。私は……母親なのに、何も出来なくて、本当にごめんね」

その言葉は、悠緋の胸の古傷を鋭く抉った。

幼い頃から課せられていた、訓練という名の、血を吐くような暴力。あの地獄のような家から連れ出してくれたのは、奇妙なことに、防衛組織からの適合者へのオファーという契約書だったのだ。

母親の、縋るような、そして罪悪感に濡れた瞳を見て、悠緋は内心の動揺を隠しながら、優しく首を振った。

「そんなことないよ。母さんのせいじゃない。俺は、今こうしてちゃんと生きているし……セイバーズとしてみんなを守れて……嬉しいよ。だから、自分を責めないで」

「悠緋……」

母親を安心させるために紡いだ言葉。けれど、悠緋の心の中には、冷たい泥のような違和感が残った。

（俺は本当に、あの人から『解放』されたんだろうか？）

高額な手当、豪華な寮、至れり尽くせりの環境。

けれどそれは、国と父親という巨大なシステムに、ただ飼い慣らされているだけではないのか。

「……そろそろ、寮に戻らなきゃ。門限に遅れると先輩に怒られちゃうから」

重苦しい空気を振り払うように立ち上がり、悠緋は実家を後にした。



夜の帳が下りた帰り道。自動運転の送迎車の窓から、30XX年の垂直にそびえるサイバー都市の深淵を眺めながら、悠緋は深くため息をついた。

ネオンの光が届かない下層へ向かって、巨大な建築物の構造体が幾重にも重なり、無数の空飛ぶ車両が光の尾を引いて縦横無尽に飛び交っている。

管理された幸福が保証されているのは、この光り輝く上層だけだ。その秩序立った美しさに、悠緋はただただ、疲弊した身体を深くシートに沈める。

胸のざわめきが収まらず、このまま真っ直ぐ寮の自室に帰る気になれなかった。

少し夜風に当たって、頭を冷やしたい。

車を寮の敷地の手前で降りた悠緋は、ネオンの光も届かない、静まり返った私道を歩き始める。

学園都市の喧騒から切り離された、人通りの途絶えた夜道。

まばらに立つ街灯が頼りなく足元を照らす中、行く手の暗がり
に、ぼつりと白い、細身の輪郭が浮かんでいた。

それは路肩に蹲り、小刻みに肩を震わせている。華奢な女性の
背中のようにだった。

「……っ」

悠緋の身体は、考えるよりも先に動いていた。最強の戦士とし
ての本能か、あるいは彼自身の底知れない優しさゆえか。足早
に駆け寄り、その細い肩へ手を伸ばす。

「大丈夫ですか……っ？」

声をかけながら、心配そうに女性の顔を覗き込んだ。

街灯の逆光に遮られ、彼女の表情はよく見えない。

ただ、酷く苦しそうな呼気が漏れ聞こえてきた。

「お腹が……、お腹が、痛くて……」

その言葉に視線を落とした悠緋は、息を呑んだ。

女性の衣服の腹部が、球状に大きく膨らんでいる。

「えっ、あっ……！妊婦、さん……？待ってください、今すぐ救急車を呼びますから！」

慌てて通信端末を取り出そうとした悠緋の鼓膜に、信じられない声が届いた。

「救急車？いない。ふふっ。あはは、おかしい」

「え……？」

端末を操作する悠緋の手が止まる。

蹲っていた女性が、ゆっくりと顔を上げた。

「だって……あまりにも、簡単に引っかかるから」

くすくすと鈴を転がすような、甘やかで、けれど背筋が凍りつくほどに無機質な笑い声。

悠緋は女性の言っていることの意味が理解できず、そのあまりにも場違いな態度に困惑した。

「あなたは、何を」

言いかけた悠緋の目の前で、女性の貌がぐにゃりと歪んだ。

目や口の位置が、まるで子供の描いた不細工な福笑いのようにドロドロと溶解し、位置を変えていく。それはもはや人間の造形ではなく、粘土細工の崩落だった。

「しまっ——」

罨だと気づき、悠緋が『A因子』を活性化させて戦闘スーツを現出させようとした、まさにその一瞬。

女性だったものの身体が、内側から爆ぜるように漆黒の、泥のような粘液の塊へと変貌した。大口を開けた深淵そのものの影が、驚愕に目を見張る悠緋の全視野を塗りつぶした。

「あ、が——ッ!？」

悲鳴すら上げる隙は与えられない。

津波のような汚濁の肉塊が、悠緋の身体を頭から丸ごと、貪るように飲み込んでいく。超常的な膂力で四肢をがんじがらめに絡め取られ、悠緋は闇の奥深くへと引きずり込まれていった。

数秒後、静まり返った夜の私道には、街灯が虚しく道を照らすばかり。

そこには大和悠緋の姿も、蹲っていた妊婦の残滓も、跡形もなく消えていた。

○ウトガルザの実験室【検査/クスコ】

視界は、紫色の光に塗り潰されていた。

焦点が合わない。膜の向こう側を覗いているかのような、ひどく頼りない視界。脳は泥の中に沈んだように重く、意識を繋ぎ止めることさえ苦痛を伴った。

全身を支配するのは、強烈な倦怠感。全身麻酔を打たれた後のような鈍重さが、悠緋の思考を麻痺させている。

(……ここ、は……?)

拘束されている。手首と足首にまとわりつく硬質な金属の冷たさと、重力から切り離されたような違和感。

ぼやけた視界の中に、いくつかの黒い影が揺らめいている。3つ、あるいは4つか。まともに数える思考力すら残っていない。

その群れの中で、異様な存在感を放つ影が一つ、悠緋の視界に割り込んできた。

白衣を纏った、骸骨のような顔、あるいは、頭蓋骨を模した仮面か。

彼が黒い影たちに向かって、耳障りな音節を並べ立てている。それは人間が発する言語の音律ではなく、歪な旋律を奏でるような、おぞましい何かの通信だった。

「——ッ」

悠緋が微かに喉を鳴らした瞬間、骸骨の男がピタリと動きを止めた。

『あッ！ウトガルザ様！こいつ、目覚めてますよ！』

黒い影、助手の報告に、骸骨頭の男は興奮を隠すように肩を震わせた。その白骨の顔が、ゆっくりと悠緋の方へ傾く。

『おおっ、流石は最強のアセットだな。うーん、身体はまだ全然動かないか……。麻酔、脳には軽めに入れたから効きが悪いのかな？』

ギガ・ネビュラの科学者、ウトガルザは満足げに手元の端末を操作した。

カチャカチャと金属音が響く。どこか鋭利な刃物が擦れ合うような、不安を掻き立てる音だった。

ウトガルザの手元から、巨大な銀色のハサミが取り出され、その刃が、天井の紫色の照明を反射して怪しく光を放った。

『さて、こいつの切れ味を試すのでしょうか。ロキ様の身体組織を組み込んだ、特製の超合金ブレードだからね。防衛隊の装甲すら紙のように裂くって言う代物だ、使い心地が楽しみだよ』

背筋に、氷を直接押し当てられたような悪寒が走った。

手足はまだ鉛のように重い。だが、微かに戻り始めた触覚が、目の前の凶器が放つ殺気を脳に伝えている。

『あ～あ、怯えないで。お洋服を切り刻んで、ちょ～っと中身を見せてもらうだけだからねえ』

ウトガルザの空っぽの眼窩の奥で、二つの光の球体が怪しく三日月型に歪んだ。それは笑っているようにも見える。

そんな嗜虐的な気配を発散させながら、刃先を悠緋の胸元へと近づけていく。

その時、そばに控えていた部下が呆れたように呟いた。

『ウトガルザ様、通じてないっすよ。言葉』

『ええ～、困ったなあ。悪戯に怯えさせるとバイタルに影響を与えてしまうだろう？誰かぁ、通訳う。通訳はいませんかぁ？』

ウトガルザは芝居がかった仕草で周囲を見回す。

自身の細胞を分裂させて作り出した、似た性質を持つ助手の一人が、他人事のように肩をすくめて答えた。

『そうですねえ……ロキ様くらいっすかね、あの人、ありとあらゆる生き物の言葉を理解しているからなあ。マジでチートっすよチート！』

ウトガルザ自身、ロキから肉体を分け与えられ自我を持った

『幹部』の1人でありながら、その関係性はどこか歪で、人間味みている。

悠緋にとっては何一つ理解できない、人外たちの会話。

全身の自由を奪う重たい麻酔のせいで、指先ひとつ動かすことも、言葉を返すこともできない。けれど、その静まり返った肉体の檻の中で、耳の奥を殴りつけるようなドクドクという自分の鼓動だけが、異常なほど激しく熱を帯びて脈打っていた。

ただ心臓だけが必死の警鐘を鳴らし続けている。

【チリリリ……】

その時、紫色のモニターの端で、甲高く不快なノイズとともに通信ランプが明滅した。

ウトガルザや助手たちの脳内に直接、極上のビロードで包み込むような、低く艶やかな声が響き渡る。

彼らの創造主であり絶対的な主であるロキからの、耳元で囁かれていると錯覚するほどの妖しい声。声音そのものが持つ甘美な毒に、実験室の冷たい空気さえもが微かに熱を帯びるようだった。

『ウト、その子の怯える顔、実にいいねえ……。モニター越しでも、素晴らしいバイタルの乱れが見えるよ。そのままそのスーツを切り刻んで、検査に入っちゃって。僕もここから、じっくり見せてもらうからね』

『おっと、ロキ様直々のご見物かい！こりゃあ張り切らないとねえ』

ウトガルザは一層嬉しそうに空洞の奥の光を細め、手にした巨大なハサミをジャキジャキと鳴らした。

拉致される直前、悠緋は死に物狂いで『A因子』を覚醒させ、戦闘スーツを現出させることには成功していた。

肉体を保護する硬質なプロテクター、当然、生体ロックがかかったスーツは外部から脱がせることなど不可能なのだが。

しかし、ウトガルザの持つハサミは、ロキの生体細胞から抽出した未知の成分で鑄造された超合金の塊だ。

ハサミの刃が、ゆっくりと遊ぶように、悠緋の胸元の装甲へと滑り始めた。

絶対に傷つくはずのないスーツの強固な軍用規格の結晶性ポリマー素材が、チキ、チキ、と不自然な金属音を立てて容易く裂けていく。

「……っ、う、あ……や……！」

やめろ、と拒絶を叫ぼうとした口内は、痺れた舌が鉛のように重くもつれるばかりで、まともな発声を許してくれない。

声にならない悲鳴が、ただ情けなく悠緋の喉から漏れる。

麻酔で満足に動かない身体。その自由を奪われた状態で、唯一の防壁であった衣が、無残に解体されていく。

剥き出しにされていく己の肉体、モニターの向こうから粘着質な視線を送っている得体の知れない存在。

その底知れない恐怖に、悠緋のバイタルアラームは、ただ虚しく警告の赤色を灯し続けるのだった。

胸元から、下腹部、そして無防備な局部までが縦一文字に割られ、左右に剥ぎ取られた。手足にはまだ強固なスーツが絡みついたままだというのに、最も恥ずかしい中心線だけが、冷たい空気の中に晒されてしまう。

『ふむ、この年頃の人類兵器を検分するのは初めてだからなあ。なるほど、見た目、体格は普通の子供と変わらないね。サイズ、皮膚の感度……特に変わったところはないな』

ウトガルザはピンセットやひんやりとした金属製の計測器を悠緋の滑らかな素肌、そしてまだ少年のそれである未成熟な局部へと容赦なく押し当て、数値を記録していく。

『なるほど、人類の埋め込んだ因子と、我々の軟体細胞の親和性は抜群だ。これなら最高の“孕み腹”になるベースとしては申し分ないねえ』

ウトガルザが何を言っているのか、全く分からない。

ただ、下腹部に向けられる彼らの視線が、あまりにも無機質で、だからこそ恐ろしかった。羞恥のあまり叫び出し、今すぐここから逃げ出したいのに、指先ひとつ動かせない。

防壁を剥ぎ取られた下半身を眩いライトに照らされたデリケートな肌が、本能的な羞恥で粟立つ。